

シリーズ奉仕職を考えるⅣ

スチュワードシップについて

司祭 ガブリエル 五十嵐 正司

サムエル 戸川 達男

共著

発行によせて

奉仕職シリーズ『スチュワードシップについて』の発行を心から歓迎いたします。同時に本書の作成に意欲的に取り組んでくださった教区のスチュワードシッププロジェクトチームのみなさんに感謝します。

数年前から東京教区ではプロジェクト制度を取り入れてさまざまな奉仕活動を展開してきました。プロジェクトの活動は一定の期間を定めてその期間内で課題の達成を目指していますが、プロジェクトの内容によっては期間が終了しただけですべてが完結するのではなく、さらに各教会でその活動をそれぞれの状況に応じて引き継いでさらに展開していくようなものもあります。スチュワードシップという奉仕の働きは各個教会においてその精神と実践が展開することが最終課題です。スチュワードシッププロジェクトチームの皆さんも、チームの働きの過程で自分たち

の任期が終わっても、各個教会で取り組むことをビジョンに抱きながら、本書を作成したものと思います。その意味でチーム自体が「スチュワード」として作業されたのです。

パウロは、神からいただいた恵みをむだにしてはいけません」とコリントの信徒に宛てた手紙で勧告しています（コリント二、六章一節）。本書の主題は「神の恵みに対する応答」です。私たちに豊かに与えられている神の恵みをむだにすることなく、神の恵みに感謝しつつ教会の奉仕の働きをますます豊かなものとしていくために、本書を教会の交わりの中で読み、スチュワードシップについての学習を進められるようにお勧めいたします。

日本聖公会東京教区

主教 ヨハネ 竹田 眞

一 スチュワードシップとは

スチュワードシップとは、ひとことでは「神の恵みに対する応答」ですが、このような言葉の説明よりむしろ、一つの事例が理解の助けとなります。

ダビデ王の時代に、ダビデの息子ソロモンによって神殿建設が進められることになりました。そのためにダビデは莫大な量の金、銀、青銅、鉄、木材などを寄進し、また民にも寄進を呼びかけました。その結果、おびただしい量の資材がささげられました。そこで、ダビデは民の前で主をたたえて言いました。「このような寄進ができるとしても、わたしなど果たして何者でしょう、わたしの民など何者でしょう。すべてはあなたからいただいたもの、わたしたちは御手から受け取って、差し出したにすぎません。」（歴代誌上二九章一四）。

この言葉は、祈り書の聖餐式式文の中で奉獻の箇所に使われていることからわかるように、神の恵みへの応答としてささげる態度の表明です。つまり、わたしたちの持てるものすべては神からいただいた恵みであり、その恵みに対する応答として、ふさわしい時に神に差し出すのがささげ物である、と考えるのです。また、神から受けた恵みである持ち物を賣

任をもって管理し、必要なときにそれを差し出すことによって、神と人との望ましい関係が保たれるわけです。

主イエスはしばしば、主人と雇い人のたとえでこのことを語られました。たとえば、タラントのたとえ（マタイ二五章一四～三〇、ルカ一九章一一～二八）、不正な管理人のたとえ（ルカ一六章一～九）、取るに足りない僕のたとえ（ルカ一七章七～一〇）、仲間を赦さない家来のたとえ（マタイ一八章二三～三五）、ぶどう園と農夫のたとえ（マタイ二一章三三～四四）、マルコ二二章一～二二、ルカ二〇章九～一九）などです。これらのたとえで示されているように、わたしたちには、委ねられている神の財産を責任をもって管理することが求められています。そこで、管理する人を表すスチュワードという言葉が用いられるようになりました。

このように、スチュワードシップは神から委ねられた恵みを責任をもって管理し、恵みに応えることのできる管理人となることの表明であり、それがわたしたちひとりひとりに求められている生き方であるとともに、教会のあり方をも示しています。つぎのようなスチュワードシップの定義も、理解の助けになると思います。

スチュワードシップとは、キリストを通して与えられた恵みとわざに対して、教会と人がなすべき応答である。この応答として、われわれは喜びと感謝をもって神に礼拝をささげ、この世が被造物であることを認識し、地球の資源を人の必要を満たすために神が与えられた恵みとして扱い、われわれの命も力も持ち物も神からの賜物として喜び楽しむとともに神のわざのために用い、福音の擁護者となる道を求め、キリストのこの世への宣教のわざに加わる。⁽¹⁾

二 なぜいまスチュワードシップが注目されるのか

スチュワードシップの基本的考え方は、このように旧新約聖書を通して一貫して示されているメッセージですが、スチュワードシップという言葉が使われるようになったのはわりあい最近のことです。そのきっかけとなったのは、一九世紀後半のアメリカの教会におけるスチュワードシップ運動でした。独立以前のアメリカでは、ヨーロッパの教会が移住した自国民から教会税を徴収していました。しかし、強制的な教会税の徴収に対して教会の側からも強い反対運動が起り、独立後に教会税は廃止されました。けれども、それによって教会財政は危機に陥ってしまいました。そのとき、一信徒の呼びかけによって自発的な献金の運動が起り、やがて献金だけではなく自発的な奉仕を目的とする信徒の運動となって広まり、スチュワードシップという言葉で呼ばれるようになったといわれています。⁽²⁾

また英国では、第二次世界大戦によって多くの教会の建物が破壊され、その修復のために教会財政が危機的な状態に陥りました。そのため、一九五〇年代にさかんにスチュワードシップのキャンペーンが行われ、自発的な献金によって教会財政の危機から救われたとのことで

す。

しかし、皮肉なことに、スチュワードシップの運動が教会財政の危機を救うのに成功したことによって、スチュワードシップが献金を増すための運動だと見なされるようになってしまいました。その後一九七〇年代になって、教会が資金を集めることにばかり熱心になり、教会本来の働きをなしえなくなっているという反省が起り、神の恵みへの応答としてのスチュワードシップが再発見されるようになりました。

日本の教会では、これまでスチュワードシップという言葉はほとんど使われませんでした。が、信徒の自発的な奉仕が求められていることは、欧米や他の国々の教会と同様です。とくに、日本は信徒数の少ない教会が多いため、信徒数のわりに聖職者が非常に多く、教会財政の相当部分が聖職者の人件費に用いられるので、教会や教区の活動には財政的な余裕がなく、より多くの信徒の奉仕を必要としています。そこで、スチュワードシップが注目されるようになってきました。

しかし、もしスチュワードシップが、たんに献金や奉仕の呼びかけだけに終わるならば、欧米の教会でスチュワードシップが資金集めの活動になってしまったように、スチュワードシップ本来の意味が失われてしまいます。したがって、スチュワードシップの考えを取り入

れるには、
まずスチュワードシップの基本の考えを学ぶことが大切です。

三 受けることの必要とささげることの必要

スチュワードシップにおいて、ささげることの本質に対して二つのとらえ方があります。ひとつは、教会、隣人あるいはわたしたちのまわりの社会がいま必要としているものをささげることがスチュワードシップだという見方です。教会の財政の危機を救うために献金の呼びかけがなされたのはこの一例です。それは「受けることの必要」に應えることです。必要に應えることこそ主イエスの行為だということができます。主イエスに近寄って衣にふれた女のように、だれでもキリストに近づこうとするものは許され、またキリストはこのような者の内で働かれると考えることができます。⁽³⁾

一方、スチュワードシップは「受けることの必要」ではなく、「ささげることの必要」なのだというとらえ方があります。スチュワードシップが神から受けた恵みに対する応答だという点に注目すると、ささげることは「ささげることの必要」によるのであり、ささげもの大きさは感謝の大きさを表していると考えることができます。ですから、たとえ教会が巨額の借金をかかえていようと豊かな資産を持っていようと献金の額にかわりがないというこ

とがあっても当然だと考えられるわけです。^①

この二つのとらえかたは一見矛盾しているようですが、スチュワードシップの別な側面を表しているとも考えられるので、一方が正しく他方が誤りだと言うのは早計ではないかと思えます。むしろ、教会財政の危機のような「受けることの必要」に遭遇したとき、それまで気付かなかった自分の受けている恵みの大きさに気付き、恵みに対する感謝の思いから「ささげることの必要」に思い至るということがあるのではないのでしょうか。また逆に、「ささげることの必要」について学ぶことによって、それまで気付かなかったいろいろなささげ方、たとえば時間や才能や持ち物をささげることができることを知り、そのささげものが周囲の「受けることの必要」を満たすところに神の計画があるのだということに思い至るかもしれません。

欧米のスチュワードシップについての書物やパンフレットなどでは、上の二つのとらえ方の一方だけが強調されているものがあり、必ずしも考え方が統一されていませんが、いずれのとらえ方も聖書の教えに忠実で、それなりに説得力があります。そこで、スチュワードシップは「受けることの必要」とともに「ささげることの必要」によってうながされる行為だと考えるのが妥当だと思います。

四 時間、才能、持ち物

スチュワードシップは「神の恵みに対する応答に生きること」が本質なのだと言っことを説明しました。しかし、ただ学ぶだけで実践がともなわなければ何にもなりません。そこで、スチュワードシップを実践するために、何をどのようにささげたらよいのかを具体的に考え、実行することが求められています。

何をささげるかということについては、時間、才能、持ち物（あるいは金銭）という三項目が取り上げられるのが普通です。わたしたちに与えられている時間、才能、持ち物を神に受け入れられるように用いることが、スチュワードシップの実践です。しかし、時間や才能や持ち物をささげることそれ自体がスチュワードシップであるかのように誤解されないように注意しなければなりません。スチュワードシップは献金の呼びかけや奉仕のために走り回ることではなく、神の恵みに対する応答として、言い換えればクリスチャンとして自覚的に生きることであって、その結果がささげる行為となって現れるのです。

時間をささげることは、まず時間がいかに大きな恵みであるかを自覚することから出発し

なければいけません。ことに、「現在」は神の時間であつて、つねに隣人の必要のためにさげることのできる可能性を持つており、「現在」という恵みが与えられていることを自覚してそれを用いることがクリスチャンとしての時間のスチュワードシップだということができま⁽⁴⁾す。隣人のために時間をささげることにはしばしば妨げとなるのは、自分自身の未来への不安です。そのとき、「明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労はその日だけで十分である。」と言われた主イエスの言葉によつて、神が現在を支えてくださるようになり、未知な未来もお支えくださることを確信し、今日の責任をはたすために「現在」を用い、希望をもつて明日に向きあうことができるのです。

才能についても、才能が神からいただいた恵みであることの自覚が出発点となります。人によつては、だからとも認められるような特別な才能、たとえば優れた音楽の才能が与えられていることがあります。しかし、ささげることができるのはいわゆる天才的な才能ばかりではありません。使徒パウロが自分の弱さまでも神の恵みであることを発見し、宣教のために役立つことができるのを喜んだように、失敗、不幸、苦難などの経験さえも、隣人のためにささげることのできる賜物であることを発見することができるかもしれません。一方、他人の才能を認めることは必要なことかもしれませんが、「あのひとは優れた音楽の才能を

持っている人だ」というように、その人の人格より先に才能に注目することは、教会のために才能を持った人たちが操られ利用され、人格が傷つけられる危険につながります。したがって、とくに教職や信徒のリーダーは、才能をささげるようにつなががす以前に、まず神に仕えるようにつながることが大切です。

食物や衣服は生きるために必要であり、その必要が満たされるときその恵みを感謝するとともに、必要が満たされない隣人のために、持てるものをさしだすことが持ち物をささげることのはじまりであったことでしょう。しかし、聖書の時代でもすでに貨幣経済が発達していて、金銭をささげることによって、より効果的に援助を必要とする人々を助けることができたので、献金という形でささげるのが一般的になっていました。今日では、経済活動がますますさかかになり、ほとんどあらゆるサービスが商品化され、それだけ貨幣の働きが拡大したと考えられます。したがって、献金の必要が増す一方、各人にとつても金銭をいのちのように大切にしなければならなくなりました。その結果、金銭をささげることに対しての迷いが増し、神の恵みに対する純粹の感謝の思いから献金をささげることが困難になってきたのではないかと思われます。

しかし、貨幣経済によつて、直接に手助けをすることのできない人々に対して、献金を

送ることによって有効な援助ができるようになったわけです。したがって、献金の呼びかけにおいては、そのささげ物がどのように用いられるかを納得できるように説明し、とくに教会組織や政府機関によってなされる援助などの場合、人対人の関係が失われることのないよう配慮することが必要です。

また献金をささげる側も、それがどのように用いられるかを確認することが求められます。すなわち、「献金をささげるときはいつも、ささげ物は人格の延長だということを認識しつつ、ささげた後にそれがみ旨にかなうように用いられるよう祈るとともに、その使途について確認し発言することが必要である」といわれます。¹⁾

五 感謝をもって、惜しまずに

スチュワードシップは理屈ではなく実践ですから、当然その成果が問われます。しかし、スチュワードシップの成果は、たんに献金や奉仕の量で測られるのではなく、どのようにささげたかにかかっています。そこでとくに強調される事柄が、しばしば二つのキーワードすなわち、「感謝をもってささげること」と、「惜しまずささげること」で説明されます⁽⁵⁾。スチュワードシップは神の恵みに対する応答ですから、神の愛に対する感謝の思いがこめられなければ神に喜ばれるささげ物とはなりません。また、ささげ物の量が多すぎるのではないかもっと少なくてもいいのではないか、というようなことを思いながらささげることがむなしきことです。

しかし、このような説明よりも、福音書に記されている、主イエスに高価な香油を注いだ女の記事（マタイ二六章一―三）から、もっと適切に、ささげることの理想像を学ぶことができるように思います。この女の一見無駄なような行為が、まさに主イエスがこの女に与えられた救いの恵みへの応答であり、主イエスに惜しみなく注がれた愛が、高価な香油をす

こしも惜しむことなくささげるといふ行為となつたのです。この箇所の聖書注解の中で、バークレーは「愛は計算を度外視する」ことを指摘したのち、この女とは正反對の例を示して、「人の尊敬を失わない程度に、最小限にキリストと教会にささげるにはどうしたらよいかなど考えるものはクリスチャンといふことはできない。」と述べています。⁶⁾

六 継続的にささげること

時間、才能、持ち物、あるいは献金をささげるのに、地震、台風、洪水のような災害の場合などには、緊急の呼びかけにつなががされて衝動的にささげる気持ちは起こることがあります。一方、収入の一定の割合を献金としてささげたり、毎週決まった時間を奉仕にあてるように、継続的にささげることがクリスチャンとして大切なつとめだと考えられています。

「継続的にささげること」を「受けることの必要」の面からみると、困難な状況にある人々や教会を支援するには多くの場合継続的な援助を必要としていることから理解できます。また、教会の中の役割や地域社会でのボランティア活動に時間や才能をささげる場合でも、継続的に奉仕がなされなければ有効な働きとはなりません。そこで、たとえ奉仕や献金の動機が衝動的であつても、有益な働きをしようとするなら、その動機となつたささげる気持ちは継続することが大切です。スチュワードシップの活動としては、継続的にささげることができるようにながし、また励ますことを重視しています。とくに欧米の教会では、一定の期間たとえば三年間にどれだけの献金をするというような献金の誓約（プレッジ）が行われてい

ます。また奉仕についても、たとえば年ごとに奉仕の登録をすることによって、一年間を通して奉仕にあたることが求められています。

一方、「ささげることの必要」の面からも、いつも豊かな神の恵みのうちにあることを覚え、その恵みに対する応答として、捧げものを欠かさないことは信徒のつとめであり、また信仰の支えにもなります。継続的にささげるために、神からいただいた恵みの内から一定の割合を神にささげることが旧約の時代から律法として定められていました。また新約においても、たとえばパウロが「週の初めの日にはいつも、各自収入に応じて、幾らかづつでも手もとに取って置きなさい」(エコーリ一六章二)と記しているように、収入の一定の割合をささげることが奨められています。とくに十分の一献金を重んじるバプテスト教会では、スチュワードシップの活動として十分の一献金の奨めに重点がおかれています^(七)。実際には、多くの人にとって収入の十分の一をささげることはたいへん困難なことですが、たとえ三%でもあるいは二%でも、収入の一定の割合をささげることは大切だと考えられています。しかし、継続的にささげることが、ややもすると感謝の思いを忘れ、たんなる習慣的な行為になりやすく、律法主義に陥る危険があります。また、献金だけでなく継続的な奉仕についても、長年続けていくうちに律法主義的になっていく恐れがあります。そこで、いつも神の恵みを再

確認し、その恵みに対する応答として、感謝の思いをもってささげ、奉仕することができるようながすために、スチュワードシップの活動が重要な役割をはたします。

七 教会での奉仕のスチュワードシップ

教会はその使命である宣教のために多くの働き手が必要としており、またそれによって信徒ひとりひとりの時間や才能をささげる機会が与えられています。とくに日本の多くの教会は、規模が小さく財政的にも困難な状態にあり、教会が必要としている働きのために報酬を払って人を雇うことはとうていできませんから、信徒の奉仕なしには積極的な宣教を行うことはほとんど不可能です。実際、ほとんどすべての教会は、多かれ少なかれ信徒の奉仕によって支えられています。しかし、それほど重要な信徒の働きについて、これまでわりあい取り上げられることが少なく、一部の信徒の奉仕に頼っていたり、新たに教会に加わった信徒になにも奉仕の機会が与えられなかったりすることが少なくないのが現状ではないでしょうか。

そこで、教会によっては、必要としている奉仕の一覧表を作り、毎年奉仕に参加する信徒をつめるようにしています。このようにすることによって、信徒が自発的に奉仕に加わることができるようになり、与えられている時間や才能をささげる機会が増し、それによって教会の必要が満たされます。

教会での奉仕の種類はそれぞれの教会によって違いがありますが、共通するところも少なくありません。たとえば、礼拝のための奉仕として、アコライト、奏楽、オルターギルド、アッシャー、聖書朗読、聖堂の清掃、音響係りなどがあります。また、日曜学校、聖書研究、祈祷会、家庭集会、週報作成、文書作成、新来者の世話、会計補助なども必要です。また、愛餐会の食事の準備、誕生カードの発送、逝去者記念の案内、バザーやサマーキャンプなどのさまざまな行事、クリスマスやイースターの祝会の準備、建物のメンテナンス、庭の整備、コンピューター担当などもあります。そのほか、対外的活動として、ボランティア活動、教会グループの活動、他教会との交流などのための奉仕も必要となることでしょう。

このほかに、自宅での代祷を重要な奉仕の項目として取りあげている教会もあります。教会内外の人々のため、社会の様々な出来事のために自宅で祈ることはだれにでもできることです。それをスチュワードシップとしてとらえることによって、恵みへの応答として継続的にささげることのできる機会として、祈りの大切さを再確認することができます。

これらの奉仕を、衝動的にはなく、継続的に行うことは、「ささげることの必要」と「受けることの必要」の両面からみて重要なことです。そのために、奉仕は思いつきではなく、登録することによって責任をもって役割りをはたすようにながすことが大切です。しかし、

奉仕はあくまで自発的になされなければなりません。したがって、強要されたり他人の目を気にするようなことがあってはなりませんし、状況が変わって奉仕が続けられなくなつたようなときの適切な配慮も必要です。このような信徒への配慮は牧師がするのが普通かもしれませんが、奉仕は信徒の自発的な行為であることから、信徒のひとりあるいは数人をスチュワードシップ担当者として、牧師の働きを支えるのが良いという考え方もあります。欧米の多くの教会では、スチュワードシップの担当者がおかれており、おもに献金の呼びかけなど教会財政に係る役割を担っていますが、教会の奉仕のすすめもスチュワードシップの重要な働きとしてとらえられています。また日本の教会ではスチュワードシップという言葉はあまり使われていませんが、多くの教会では奉仕の登録が行なわれており、それをスチュワードシップとしてとらえることが、奉仕に対する理解を深め、また実践につながっていくのではないかと考えられます。

八 個人のスチュワードシップ

神の恵みへの応答として、まず主日の礼拝を守り聖餐にあずかることがクリスチャンとしてのつとめでしょう。そこからこの世に派遣され、一週のつとめがはじまります。教会での奉仕を週日に行うこともありますが、家庭や職場の生活がむしろ時間的にも才能を発揮する場としても大きな割合を占めます。その生活の中で、クリスチャンであることを自覚し、神の恵みへの応答として、神に喜ばれるように時間や才能や持ち物をささげることが、やはりスチュワードシップと考えることができます。

しかし、多くの人にとつて現実の日々の生活はたいへん厳しく、自分と家族の生活の必要を満たすためにほとんどの時間と持てる力を使わなければならない人も少なくないことでしょう。その中でスチュワードシップを実践することは容易なことではないかもしれませんが、そのことはすでに神がご存じであり、むしろ、自分と家族の必要を満たすことがクリスチャンとして第一になすべきつとめです。

そこで重要なことは、必要と欲望を区別することです。生活にどうしても必要だと思っ

いたものでも、よく考えると、思っていたより少ないものでも必要が満たされるばかりでなく、欲望の大部分が満たされることを発見することがあるかもしれません。生活にほとんど余裕がないと思っても、収入の一部あるいは週のきまつた時間を教会や社会の奉仕にささげた残りでかなり満足な生活ができるかもしれないのです。そこで、どれだけの割合をささげるかは、自分自身と家族の必要についてよく考えた上で決断すべきです。

また、教会の外のボランティア活動などでよい働きをしている人は、時間、才能、持ち物などの賜物を社会のためにささげています。社会でよい働きをしている信徒も教会でよい働きをしている信徒もおります。教会員の中には、神が与えてくださった賜物を何に用いるか責任をもって考え、教会のための働きよりむしろ社会のための活動に多くの時間をあてる人もあるかもしれません。教会は、このような信徒を支援していくべきで、教会の都合で一方を減らして他方にまわすように強いるようなことをしてはなりません。ただし、奉仕活動をしている団体でも、その活動が利己的な動機による場合には、かかわらないように注意をうながすことが大切です。

九 スチュワードシップを学ぶ機会

スチュワードシップは神の恵みに対する応答ですから、たとえ特別に学ぶ機会がなくても、毎主日に礼拝を守り、説教を聞くことによって自然に身につけていくことでしょう。しかし、教会生活の折々にスチュワードシップに関連する学びの機会が与えられれば、より明確にスチュワードシップを理解して実践する助けとなります。

とくに、スチュワードシップを学ぶのは早いほどよいといわれます。毎週子供を日曜学校へつれてゆき、主イエスの言葉や愛について学ばせることはクリスチャンの生活の大切な要素であり、スチュワードシップを学ぶためにもたいへん重要です。日曜学校では、おこずかいの中から献金をささげることを学びますし、施設の訪問や、病氣の人にカードを送ったりすることから、神の恵みに応えて感謝して奉仕することを学ぶことができます。

また、洗礼、堅信準備や結婚準備にスチュワードシップの学びをとり上げることが大切だといわれています。ことに、献金については、教会がいつも献金を呼びかけているように見られるのを恐れて、ふだんは学びのテーマとしてとり上げられることが少ないのですが、献

金はスチュワードシップの大切な要素であり、献金がキリストによってもたらされた恵みへの感謝から発する霊的な行為であることの理解に至らなければなりません。そのように、スチュワードシップについては、信仰生活の節目にくり返し学ぶことが大切です。そのほか、大齋の学びなどのテーマにとり上げることでもできるでしょう。また、聖職者にとつても、按手礼の準備や按手後の訓練期間に、スチュワードシップの神学とその実践を学ぶことが必要だといわれています。⁽¹⁾

一〇 スチュワードシップの成長と約束の更新

スチュワードシップの学びは決して難しいことではありませんが、自分の時間、才能、持ち物を感じ謝をもって惜しみなくささげることがを体得するまでに長い道のりが必要なこともあります。そこで、教会はひとりひとりのスチュワードシップの成長を見守り、支えていくことが大切です。

ことに献金については、スチュワードシップの成長にしたがって無理なくささげられるように、段階を追って進むことができるように配慮しているところもあります。あるスチュワードシップの手引きでは、献金の種類を六段階に分け、即時的な献金、特別な礼拝の献金、特別な活動のための献金、重要プロジェクトのための献金、通年の献金、長期的な献金という順序で進むようにながらすことを奨めています。⁽⁶⁾ 即時的な献金は、突然の災害で被害にあつた人々を助ける呼びかけに応えるような場合です。このようなときには、だれでも心から惜しまずささげることができるものです。また、クリスマスやイースターのような特別な聖日には、そのメッセージに心を動かされ、やはり大きな喜びをもってささげることができます。

特別な活動には、バザーなどの行事や教会の記念の年のイベントなどがあります。また重要プロジェクトは建築などが場合です。このような特別の活動のためには惜しみなくささげようという思いを持っていても、同じような思いで通常の教会財政を支えるための月約献金をささげる段階に至っていない人もあるかもしれません。ですから、「建築献金のわりに月約献金が少ない」というようなことをとがめてはなりません。

月約献金は、教会や教区の必要をみたすために大切であると同時に、六で述べたように、継続的にささげるといふ意味で「ささげることの必要」でもあるのです。すなわち、恵みに対する感謝の気持ちから継続的にささげる約束をしたとき、神との約束の責任をはたすことに喜びを見い出すことができるようになることでしょう。献金の約束は、毎年更新するのが普通です。毎年の更新によって、成長に応じたスチュワードシップを實踐していくことができます。

段階を追ってスチュワードシップを實踐していくことは、教会の奉仕についても大切で、奉仕の約束を年ごとに更新することがすすめられています。年ごとの更新によって、新たな奉仕に加わる機会となり、転入会者にも奉仕の機会を与えるのに役立ちます。

―― スチュワードシップによって何が変わるのか

スチュワードシップを実践することによって、わたしたちの生活にいろいろな変化が起ります。まず、ささげることの目的についてはつきりした認識をもつことができるようになることです。教会生活が長い信徒でも、奉仕や献金が習慣的な行為となり、ささげること感謝の思いがともなわなくなり、むしろ牧師や教会員の評価が気にかかるようになってしまふ恐れがあります。このようなときにスチュワードシップを学んで実践することによって、神とわたしたちとの関係においてささげることの必要を理解し、神の宣教のためにわたしたちの時間、才能、持ち物を必要としていることを理解することは、教会生活に大きな変化をもたらします。ことに、ささげることの動機が、しなければならぬからではなく、ささげたいという自由な思いによるのだということを知ることとは、教会生活を重荷に感じる思いから解放されることでしょう。

また、スチュワードシップを実践することによって、靈的に成長し、信仰が深められます。ですから、スチュワードシップはキリスト者の形成にいたる道筋であるともいわれます。ま

た、スチュワードシップは主イエスのライフスタイルにならうことだともいわれます。主イエスは神と人との和解のために、ご自身のいのちをささげられたのです。ですから、主イエスがわたしたちのためにして下さったことのゆえに、わたしたちも自らをささげようという思いを持つことができるのです。

スチュワードシップの呼びかけによって、実際に献金や教会の働き手が増すことでしょう。けれども、スチュワードシップを献金や奉仕を増すための手段にしようとする誘惑に注意しなければなりません。スチュワードシップの実践によって、わたしたちひとりひとりが霊的に成長し、教会の使命である宣教のわざのために自らをささげることができるように変えられていくようであればなりません。

一 スチユワードシップと祈り

スチユワードシップの本質は、奉仕のために体を動かしたり持ち物をささげる行為自体ではなく、神の恵みに対する応答としての霊的なわざです。ですから、たとえささげる時間も才能も持ち物も持たなくても、キリストの救いにあずかって新しいいのちをいただいているという恵みを喜び、感謝の思いをあらわすことができるなら、それはどんなささげものにもまさるスチユワードシップです。それは、具体的には祈りです。絶えず祈りなさいと言われるように、キリストの前で祈ることがスチユワードシップの原点です。

祈りは「神のみ心の実現」を願うことであり、自分自身のために祈ることができると同時に、他者のために「神のみ心の実現」を願い求めることもできます。それがとりなしの祈りすなわち代祷です。聖餐式の中の代祷は、個人的な願いの祈りではなく、共同体のために、他者のことを思いながら、他者に代わって祈る祈りです。

代祷は自宅でもどこでもささげることができます。自宅での代祷をスチユワードシップとしてとらえている教会があり、教会のさまざまな奉仕と同じように代祷の奉仕を登録するよ

うにしています。毎週の代祷の項目についてあらかじめ牧師から指示をつけて、自宅で代祷をささげるのです。代祷をささげる奉仕の役割を担うことは、個人的にも大きな喜びであると同時に、共同体にとっても多くの信徒の祈りに支えられていることは大きな力となることでしょう。

また、スチュワードシップを実践するためにも、祈りが大切です。状況にあわせて自由な言葉で祈ることができませんが、スチュワードシップの祈りを定めておくことも役立つでしょう。ここにスチュワードシップの祈りの一例を示します。

スチュワードシップの祈り

すべてのものは主の賜物。わたしたちは主から受けて主にささげたのです。

すべてのものをみ心によって造られ、慈しみをもって導きたもう主よ、わたしたちの持っているものすべて、委ねられているものすべてをあなたのみ心にかんって用い、隣人に仕え、あなたのみ栄えを現すことができますよう、わたしたちをお導きください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン

引用文献

- (1) *Receiving and Giving - The Basis, Issues and Implications of Christian Stewardship*- Central Board of Finance of the Church of England ed. The General Synod of the Church of England. October : 1990
- (2) 「神の同労者へ恵みへの応答」 日本バプテスト連盟編日本バプテスト連盟情報・出版部 一九九三
- (3) *Questions and Answers About Stewardship, in Sustaining and Strengthening Stewardship*, James Kelly, The Liturgical Press, Minnesota : 1996
- (4) *A New Climate for Stewardship*, Wallace E. Fisher The Parthenon Press, Nashville, Tennessee : 1976
- (5) *A Handbook of Parish Stewardship - Gratitude and Generosity*, Gordon Strutt, Mowbray, London : 1985
- (6) 「マタイ福音書下」 ウィリアム・パークレー著 松村あき子訳、ヨルダン社一九六八
- (7) 「クリスチャンスチュアードシップ」 松村あき子著 日本バプテスト連盟発行、発売ヨルダン社 一九五九
- (8) *Giving and Stewardship in an Effective Church*, Kennon L. Callahan. Harper San Francisco : 1992

付記

この小冊子の内容は、東京教区のスチュワードシップ・プロジェクトによってまとめられたものです。スチュワードシップ・プロジェクトは、司祭五十嵐正司をリーダーとして、司祭近藤幸平、佐藤正光（練馬聖ガブリエル教会）、戸川達男（聖マルコ教会）、松田正人（真光教会）、松田百合（東京聖三一教会）、宮崎 功（東京諸聖徒教会）、宣教主事岡野 峻のメンバーにより、一九九五年から三年間活動し、多くの図書、文献、冊子などから学ぶとともに、日本の教会においてスチュワードシップをどのようにとりあげていったらよいかを話し合いました。この冊子は、その実りの要約です。

なお、中村邦介司祭、宮崎光司祭からも有益な資料提供をいただきました。

あとがき

元スチュワードシップ・プロジェクトリーダー 司祭 五十嵐 正司

スチュワードシップは、これまでも何度となく浮上し、教会の良い働きとして認められ、伝えられてきました。しかしこの言葉が日本語にできないところに、不確かさがあり、理解しにくいところがあったのでしよう。ある先輩は「良き信徒となるために」と訳たと言われましたが、この小冊子では「神の恵みに対する応答」をキーワードとしてまとめました。

この冊子によって、教会のスチュワードシップについて、皆さんと分かち合えますことを嬉しく思います。一九九五年から三年間、東京教区ではスチュワードシップ・プロジェクトを実施してきました。この間、プロジェクト・メンバーはスチュワードシップの理念と実践でを諸資料で学び、又すでに実施し長い経験のあるメリーランド教区の人々から話を聞かせてもらおう等いたしました。その情報は適宜、教区の皆さんにお伝えしてきました通りです。

この冊子は多くの文献を翻訳し、紹介してくださった戸川達男氏の貢献によって作成され

ました。また、松田正人氏（東京教区宣教委員）のリーダーシップおよび宣教委員会（委員長 加藤博道司祭）の協力によって実現・配布されるものとなりました。

信徒各自が、また教会がスチュワードシップの理念を用いて下さり、主の恵みをさらに深く感じ、感謝のときを過ごされますようにお祈りいたします。

一九九九年二月 大齋節

シリーズ奉仕職を考えるⅣ
スチュワードシップについて 戸川 達男

発行 日本聖公会東京教区宣教委員会

〒105 東京都港区芝公園三 六 一八

〇三(三四三三)〇九八七

〇三(三四三三)八六七八

制作協力〃東京教区広報委員会

発行日一九九九年 四月一〇日